

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.90

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

2025 年 11 月

主な記事

島嶼研究を考える（大塚 靖）	p1
学生奮闘記「口永良部サワガニ探訪」（水野有朝）	p3
第十二回東アジア島嶼海洋文化フォーラムを開催	p7
長崎大学グローバルリスク研究センターとの連携協力	p9
フィールドこぼれ話「かけがえのない与論島暮らし」（森 隆子）	p10
連載 世界島めぐり 第十三回 「プリンスエドワード島」（鶴川 信）	p11

島嶼研究を考える

大塚 靖

（国際島嶼教育研究センター）

国際島嶼教育研究センター（島嶼研）は、1980年に南方地域総合研究センターとして設立され、その後4度の改組を経て、2010年より現在のセンターとして活動を続けています。設立以来45年にわたり、アジア・オセアニア地域の島嶼に関わる多様な研究を継続しており、ある意味では特異な組織とも言えるでしょう。島嶼を対象とした研究ですので、これらの研究は島嶼研究と呼ばれています。

この島嶼研に私は2014年に着任しました。専門は寄生虫およびそれらを媒介する動物に関する研究で、寄生虫学および衛生動物学と呼ばれる分野です。研究の過程では、島における調査も行ってきましたが、それらを島嶼研究としては、全く意識していませんでした。島嶼研に着任して最も印象的だったのは、研究会やシンポジウムにおいて、文系・理系を問わず多様

な分野の研究が取り上げられている点でした。これまでは、比較的近接した専門領域の中で研究活動を行ってきたため、毎回の議論が新鮮な驚きと戸惑いの連続でした。現在でもそのような驚きや戸惑いを感じる場面は少なくありません。当初は、島嶼研においても従来通り、島で調査研究を行えばよいと考えていました。しかし、さまざまな島に関する研究に触れ、実際に多様な島々を訪れる中で、自分の中にあった「島嶼研究」の捉え方が少しずつ変化していきます。

島で研究を行うことは、ある意味では全て島嶼研究といえるかもしれません。しかし、重要なのは「島への目線」の違いです。かつての私は、島で吸血昆虫であるブユの採集を頻繁に行っていました。標本をできるだけ効率的に収集し、研究室に持ち帰って分析し、学会発表し、

(2) 島嶼研だより No.90

論文を執筆するというスタイルです。このような、島からデータのみを持ち帰るかたちの研究は、私たちの間ではしばしば「収奪型の研究」と呼ばれることがあります。「島への目線」と言うと、学問的な表現ではないかもしれませんが。しかし、ブユなどの研究対象をきっかけに島を多角的に捉え、他分野の研究者と協働して研究を進めていくことで、島を理解しようとする地域研究へと発展していきます。研究対象のモノ・現象だけを見るのではなく、島を見つめながら、そして島のことを考えながら研究に取り組む姿勢こそが、大事であると感じています。また、研究者の島への目線は、その研究者の発表や論文にも表れているような気がしています。

2023 年度に島嶼研を退官された高宮広土先生は沖縄・奄美の先史人類学を専門にされる先生でした。近年の研究により、沖縄・奄美群島は先史時代に狩猟採集民が定住していた島々であることが明らかになっています。高宮先生は、こうした島々に狩猟採集民が定住していた事例は、先史学的にも民族学的にも世界的にはほとんど例がなく、極めて稀有であると指摘されました。さらに、この事実は、従来の世界史・人類史の定説を覆すものであり、まさに奇跡の島々とも言えることから、この事象を「島嶼文明」として提唱されました。私たちは、この島嶼文明の影響が形を変えながら、現在の奄美にも息づいているのではないかと考え、島嶼文明の視点から現代の奄美を捉えるプロジェクトに取り組んでいます。高宮先生は長期にわたり奄美に滞在され、地域の人々から深い尊敬を集めてきました。それは、先生の研究が奄美の人々に島の誇りをもたらすものであったことに加え、常に研究の目線が奄美そのもの、そしてそこに暮らす人々に向けられていたからだと思います。

現在、島嶼研では令和4年度より、ミッショ

ン戦略実現枠として「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地方創生』の革新的融合モデル」の推進に取り組んでいます。また、令和7年度には経営戦略経費による「国際島嶼研究拠点形成に向けた基盤強化」も進行中です。特にこの拠点形成は、島嶼研が長年目指してきた共同利用型の研究体制への第一歩であり、重要な節目と捉えています。これらのプロジェクトには、文理を問わず多様な分野の研究者が参画しており、島嶼という場を対象とした学際的な研究が展開されています。

「島嶼研究」を少し学問的に定義するならば、島々における地域研究であり、島という空間を地理的・社会的・文化的・生態的など多面的に捉える探究を指します。島はしばしば「小さな世界」と形容され、限られた空間の中で社会・文化・自然・経済が密接に関係しながら展開されています。そのため、島で生じる現象は、やがてより広い世界で顕在化する可能性を秘めており、島は未来の地球社会を占う縮図として、また、普遍的な現象や真理が浮かび上がる場とも言えるでしょう。

私はこの4月に、島嶼研のセンター長に就任いたしました。これらのプロジェクトを通じて、島嶼研究としての学問的な厚みを一層高めるとともに、島に向けるまなざしを忘れることなく、島嶼研の歩みを着実に進めていきます。



パープルアイランド（韓国）にて

学生奮闘記

口永良部サワガニ探訪

水野有朝

(鹿児島大学水産学部)

2025 年 7 月 10 日から同 12 日にかけて、国分高校 SSH のフィールド研修に同行し屋久島と口永良部島を訪れた。約 10 名の高校生らと引率の教員方とともに島を移動し、主に河川に生息するコエビ類と貝類を収集した。

私は大学に入ってからというもの、海でも川でもカニばかりを追いかけている。コエビ類も同じ十脚甲殻類とはいえ普段触れることの少ない分類群について、高校生らとともに学べたことは大変良い機会であった。

ところで、口永良部島にはミシマサワガニ *Geothelphusa mishima* というカニが生息している。本種は宇治島、黒島、口永良部島の河川上流域のみに生息するとされており、鹿児島大学名誉教授の鈴木廣志先生が新種記載に携わられた種である。今回、ミシマサワガニが生息するとされる河川を確認するとともに遺伝子解析用のサンプルを採取することを目的として、私の指導教員である土井航先生と島内を移動した（写真 1）。なお、ミシマサワガニは 2013 年より鹿児島県指定天然記念物に指定されているため、本種を許可なく捕獲、採集してしてはならないことに注意が必要である。

島民の方に車を出していただき、港から山間部へ移動すること数十分。林道に飛び出した草木は島民らによってある程度整備されているものの、崩落した崖やガードレールの跡があちこちに見られた。こうした崩落は島の各所で見られるようで、我々の求める沢がまだ残っているのかという心配が頭をよぎった。路上で屯するヤクシカを横目に車を進めると、林道沿いに沢らしき環境を見かけた。適当なところで車を停めていただき、準備をして沢へ降りた（写真 2）。藪の多い沢では降りる際に苦労することもあるが、今回は比較的楽に沢へ入ることが出来た。カニの隠れていそうな石を丹念にめくっていくと、比較的大きな石の下からカニが飛び出てきた。ミシマサワガニは体に小さな黒斑点が散在することが特徴の一つとされており、現れたカニはその特徴と一致した（写真 3）。その後も大型から小型個体を複数個体見かけたため、この沢はある程度まとまって生息しているのかもしれない。生息を確認するとともに無事サンプルを確保し、沢から上がった。

口永良部島は活発な火山活動が観測されている島であり、2015 年には全島民が避難する大規模な噴火が発生している。今後の火山活動によって、ミシマサワガニの生息環境が失われる可能性が考えられる。島内における本種の詳細な生息状況や動向を把握するためにも、今後も調査を行う必要があると思われる。

今回 2 つの島を訪れる機会を作ってくださった国分高校 SSH の皆様、土井航先生に厚く御礼申し上げます。

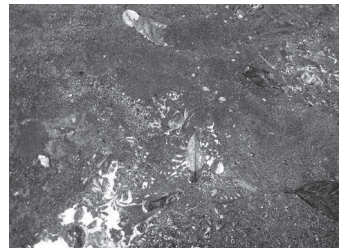
写真 1 筆者（左）と指導
教員の土井先生



写真 2 口永良部島の河川



写真 3 ミシマサワガニ



国際島嶼教育研究センター研究発表要旨

第 246 回 2025 年 3 月 10 日

鹿児島県島嶼の野生ユリ

宮本旬子

(鹿児島大学大学院理工学研究科)

橋口浩志

(鹿児島大学大学院農林水産学研究科)

ユリ科ユリ属は世界に約 115 種あり、日本産の種は、クルマユリ、ヒメユリ、スカシユリ、エゾスカシユリ、ヤマユリ、カノコユリ、オニユリ、コオニユリ、ノヒメユリ、ササユリ、ヒメサユリ、ウケユリ、タモトユリ、テッポウユリ、およびタケシマユリであるとされている。鹿児島県内では、ヤマユリ、カノコユリ、オニユリ、コオニユリ、ノヒメユリ、ウケユリ、タモトユリ、テッポウユリ、タカサゴユリおよびシンテッポウユリ等の栽培品種の採取記録がある。ヤマユリやシンテッポウユリ等は栽培下からの逸出と考えられ、タカサゴユリは台湾産の外来種である。タモトユリは口之島固有、ウケユリは奄美大島～徳之島固有、狭義カノコユリは甌島を含む九州固有で、環境省や鹿児島県のレッドデータブックに掲載されていて保護対象となっている。前半では、宮本が、主に 1990 年代より実施してきた、タモトユリ、ウケユリ、カノコユリ、およびタカサゴユリ等の生育地調査と遺伝的解析の概要を紹介する。後半では、橋口が、甌島列島および九州島西南部に自生するカノコユリ個体群についての最新の知見を紹介する。



橋口浩志 氏

第 247 回 2025 年 4 月 21 日

民謡研究家・久保けんおの仕事について

梁川英俊

(鹿児島大学法文学部)

久保けんおは、1940 年代から民謡採集を行い、『南日本民謡曲集』『南日本わらべうた風土記』等の著作により南九州の音楽文化に大きな貢献を残した在野の民謡研究家である。その活動は詩人、劇作家、教育者、作曲家、編曲家、音楽史家と多岐にわたる。

発表者は 2020 年以来、作曲家の原田敬子氏（東京音楽大学）とともに、喜界町中央公民館に保管されている久保の未発表資料集を調査・研究し、その成果を 2024 年 3 月に刊行された鹿児島大学島嶼研ブックレット No. 24『南日本の民謡を追って—久保けんおの仕事』にまとめた。また、昨年および一昨年の鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センターのプロジェクトの一環として、長年鹿児島県立図書館に保管されていた久保の録音資料の一部をデジタル化した。本発表では、以上のような調査によって見えてきた久保の活動の一端を紹介する。



梁川英俊 氏

第 248 回 2025 年 5 月 19 日

地域とのつながりと幸福度の関係について
—奄美市幸福度調査より—

馬場 武

(鹿児島大学法文学部)

これまでの幸福度に関する研究では、調査対象者の属性によって主観的幸福度の認識に違いがあることが明らかになっている。例えば、高い幸福感を実感する属性は、女性や若年層、高収入や高学歴、配偶者や子どものいる人などであることがわかっている。また、近年では、住民と地域社会とのつながりや住民の地域政策への評価が、住民の幸福実感に影響を与える可能性も示唆されている。

奄美市では、長期的な政策の方向性として「しあわせの島」を掲げている。そして、奄美市民の幸福実感について継続的に調査し、モニタリングしている。本研究は、奄美市の幸福度調査のデータをもとに、地域住民の認識する地域社会とのつながりの特徴から住民像を明らかにし、それら住民像別の主観的幸福度の違いについて分析する。

分析の結果、奄美市民は地域社会とのつながりの認識の特徴別に五つのグループに分類されることがわかった。また、地域社会とのつながりの実感が強い住民像ほど主観的幸福度は高い。つまり、地域住民と地域社会とのつながりをデザインすることで、地域住民の幸福度が向上する可能性がある。また、幸福度を指標とした政策や施策を立案する際に、住民像が明確になることで、政策立案の根拠が強化され、より良い政策評価の効果測定が可能となると考えられる



馬場 武 氏

第 249 回 2025 年 6 月 23 日

東南アジア海民にみる共生の技法
—遊動海民バジャウを中心に—

長津一史
(東洋大学社会学部)

東南アジア研究では、海を媒介として密接に関係しあう東南アジアの島嶼世界を東南アジア海域世界と呼ぶ。その範囲には、東南アジアの島嶼部と、南シナ海からシャム湾、アンダマン海までの大陸部沿岸域が含まれる。こうした東南アジア海域世界をかたちづくってきた主役のひとつが海民——海と深く関わる生活を営んできた集団——である。海民は海をわたる移動と移住を通じて島じまを結びつけ、この海域に独自の歴史地理空間を生成させてきた。この研究会では、そうした海民のうちバジャウ人に特に着目する。バジャウ人の一部は、かつて船上生活を営んでいたことで知られる。いまでも多くの人びとが沿岸や浅瀬の杭上家屋（海上家屋）に住む。人口は約 100 万人。居住地はフィリピン、マレーシア、インドネシアの三か国に拡散する。かれらの生活は、①移動性の高さ、②商業志向の強さ、③ネットワークの重要さの 3 点で特徴づけられる。研究会では、こうした特徴を持つかれらの生き様を手がかりに、東南アジア海域世界に育まれた共生の技法を紹介してみたい。



長津一史 氏

第 250 回 2025 年 7 月 14 日

奄美群島における水産業の現状と課題

尖道弘敏

(鹿児島県水産技術開発センター)

奄美群島は日本の南西部に位置する、亜熱帯海洋性気候に属する島嶼群である。各島の周囲は珊瑚礁に囲まれ、その沖合には天然の瀬礁が数多く存在し、北西沖を流れる黒潮の恵みを受

(6) 島嶼研だより No. 90

ける海域特性も相まって、古くから漁船漁業が発達してきた。主たる漁業種類は一本釣り、延縄、追込網、潜水漁業等である。また平穏な内湾域では魚類・貝類・藻類養殖も盛んである。

しかし、奄美群島における漁船漁業による2023年の漁業生産量は1,608トンで、25年前(1998年)に比べ61%減少している。これは、同時期の全国の漁業生産量の減少(45%)より大きい。

この背景には、奄美群島の地理的条件不利性、国際情勢の変化にともなう燃油や漁業用資材類の高騰、魚価の低迷、気候変動にともなう海洋環境や漁業資源の変化などが考えられる。これらの要素が複雑に作用し、漁業者の収益性低下や漁業従事者の減少に繋がっていると考えられる。

これに対し鹿児島県では、奄美群島の水産業振興施策として、資源管理の高度化、水産資源の持続的利用の推進、漁場や藻場の整備、水産物の流通・加工・販売対策、魚食普及、担い手の確保・育成、漁村の活性化などに取り組んでいる。



宋道弘敏 氏

第 251 回 2025 年 9 月 29 日

中琉球の住人 ケナガネズミ

菊池隼人

(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

琉球諸島は日本列島の南西部に位置し、地質構造的な観点から、大隅海峡とトカラ海峡の間を「北琉球」、トカラ海峡から慶良間解列の間を「中琉球」、慶良間海裂から与那国海峡までを「南琉球」と呼ぶ。それぞれの地域は大陸と

の結合分離の時期の違いによって、本州はもとより、各地域でも独自の生物相を有している。こうした特徴から、琉球諸島の奄美大島・徳之島・沖縄島北部・西表島の4地域は、2021年に世界自然遺産に登録された。

この独自性は哺乳類においても認められており、琉球諸島には他地域にはいない固有の種が生息している。本発表で紹介するケナガネズミ(*Diplothrix legata*)もその一種であり、中琉球の奄美大島、徳之島、そして沖縄島北部にのみ生息する。

発表者は2023年より沖縄島北部において、ケナガネズミの生態解明と保全を目的とした調査研究を行ってきた。本発表では、ケナガネズミの発見の経緯や過去の研究成果を概観するとともに、発信機を用いた行動追跡や、ケナガネズミの脅威となり得る寄生虫の調査など、現在進めている研究内容を紹介する。あわせて、これらの研究を通して中琉球における生物研究の歴史や、ケナガネズミを含めた固有の動物が直面している課題についても紹介する。



菊池隼人 氏

第 252 回 2025 年 10 月 27 日

薩南諸島における山川石製墓石の研究

松崎大嗣

(指宿市教育委員会生涯学習課)

「山川石」とは、指宿市山川福元周辺でとれる黄色凝灰岩である。軟らかく、加工が容易で風化に強いことから石材として古くから利用

されてきた。なかでも 15 世紀からは島津家当主墓の石材として伝統的に用いられ、「藩主専用の墓石」として理解されることもあった。しかし、これまで山川石製墓石の分布や生産体制、製作技術といった考古学的側面からの研究アプローチは少なく、その実態は不明であった。加えて、指宿市の今和泉島津家では、山川石と類似した黄色凝灰岩「池田石」を用いていることが近年の調査成果によって明らかとなり、階層性をもった石材利用も想定されるようになった。そのようななか、薩南諸島において、山川石製墓石が数多く流通していること、とりわけ島役人によって大型の山川石製墓石が建立されていることもわかってきた。薩南諸島に山川石製墓石が流通する背景には、鹿児島藩港として琉球貿易の窓口として機能した山川港の

存在が考えられるが、具体的な流通網や商業活動の実態はわかっていない。そこで本発表では、研究の基礎となる分布調査を報告したうえで、今後の研究の方向性を模索したい。



松崎大嗣 氏

第十二回東アジア島嶼海洋文化フォーラムを開催

2025 年 11 月 13 日～15 日まで第十二回東アジア島嶼海洋文化フォーラムを奄美市名瀬に設置されている本センター奄美分室で開催しました。

東アジア島嶼海洋文化フォーラムは、東アジアの島嶼域における諸問題を解決するために、そして当該地域で研究を行っている研究者の学術交流を促進するために、日本、韓国、中国、台湾の島嶼研究に関する 11 の教育研究機関が参集し、2013 年 3 月に発足した国際集会です。第一回大会は鹿児島市において本センターが主催しました。本年度は東アジア諸国だけでなく本センターと研究協力協定を結んでいる東南アジア三か国の研究者を招待し、島々における漁業、観光業、文化、文学、生物多様性などに関する講演があり、「小島嶼における社会と文化、生物多様性」というテーマのもと、各国の参加者が議論・討論・意見交換を行いました。また地元の大島高校の英語部とサング研究グループによる英語の報告もあり、盛況に終わりました。



橋口照人筆頭理事による開会の辞の様子



基調講演を行う高宮広土先生

(8) 島嶼研だより No. 90



大島高校英語部による奄美の紹介の様子



大島高校サンゴ研究グループによる報告の様子



会場の様子



インドネシア・パティムラ大学から記念品を拝受



集合写真



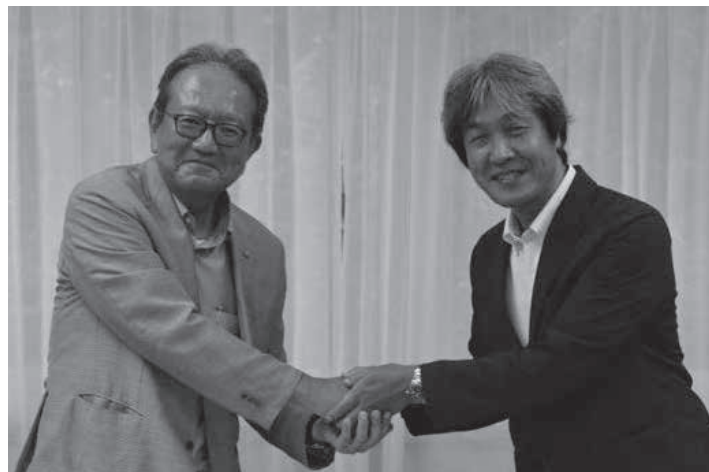
エキスカーシヨンの様子（奄美市博物館）

長崎大学グローバルリスク研究センターとの連携協力

国際島嶼教育研究センターは 9 月 16 日、長崎大学グローバルリスク研究センターとの連携協力に関する覚書の締結式を執り行いました。

本覚書は、長崎大学を基幹大学として、宮崎大学・鹿児島大学を連携大学として令和 6 年度に採択された「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS 事業）」の一環として、グローバルリスク領域研究において、島嶼地域研究の更なる深化と発展を目指し、連携と協力を推進することを目的としています。

締結式では、長崎大学グローバルリスク研究センター 岩下 明裕 センター長と、鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 大塚 靖 センター長が署名を交わし、固い握手で今後の協力への決意を示しました。大塚センター長からは、「長崎大学とはこれまでも共同研究の歴史があり、今回の事業に限らず、今後はより幅広い分野で連携を進めていきたい」との期待が述べられました。



両センター長による記念撮影 大塚センター長（右）岩下センター長（左）

～フィールドこぼれ話～

かけがえのない与論島暮らし

森 隆子（鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻）

「与論島で、保健師として働いてみませんか？」—この誘いを機に、私の島での暮らしが始まった。当初の予定は10か月。10か月ならば、まずはチャレンジしてみようかな—そのように決めてから2、3週間後には島へと向かっていた。初めての島暮らし。町役場にある地域包括支援センターの保健師（会計年度任用職員）としての日々が始まった。新参者でペーパードライバー、さらには教員経験しかなく実質的に新人保健師ともいえるアラフォーの私を「そのままで来てくだされば大丈夫です」と受け入れてくれた島の懐の深さには、正直今でも驚いている。その寛容さは、果たしてどこからきているのか、と。

与論島での暮らしをふりかえてみると、時計の針が少しだけゆっくりと進んでいるように感じられることもあった（といっても実際には、時計の針がむしろ早く進んでいる！と感じられる場面も多々あったのだけれど）。島を歩けば、誰かが縁側の椅子にゆったりと腰かけてはパトロールという名目で街中を眺めていたり、浜辺に腰を下ろして語り合っていたり、海岸端でのんびりと夕日を眺めていたり……。私自身も海を、そして島を眺め、その美しさに何度も心を奪われ、時に救われた。こうして島の暮らしを続けているなかで、次第にその“ゆるやかさ”こそが、島の日常を支えている重要な余白なのかもしれないと感じるようになった。

たとえば、ちょっとした場面において、時には真剣と思しき状況のなかでも小さな雑談やユーモアが混じり合っている（と、私には映っていた）。しばらく眺めていると、次第にゆるやかで—見極めに映るもののなかにこそ大事なことが宿っていることがわかってくる。決めすぎない、固めすぎない。ゆるやかな輪郭だからこそ、思わぬアイデアや行動が生まれる。余白に対する寛容な姿勢に、より新しい可能性が拓かれていくことを学んだ。

島で過ごした約3年間は、自らの在り方にも深くつながる学びをもたらしてくれた。厳密な仕組みや計画だけではなく、あえて寛容さと余白を残すこと。そこから、予想もしない展開が紡がれていく。何かが定まらないようにも映る状況下で、時に何かが始まりうる。その可能性を信じられるかどうか—それが、与論島での暮らしが私に残してくれたもっとも大切な問いかけである。



写真 1. 与論島に到着



写真 2. サトウキビ刈体験

「世界島めぐり」

第十三回 プリンスエドワード島 カナダ (Prince Edward Island)

鵜川 信 (鹿児島大学農学部)

プリンスエドワード島は、カナダ東部のセントローレンス湾に位置する島である。面積は約5,660 km²であり、13.9万人が居住している。位置的に、ヨーロッパからの入植の歴史に深く関わっており、カナダ建国の会議が開かれた場所でもある。さらに有名なのは、「赤毛のアン」を書いた Lucy Maud Montgomery が住んでいたことである。本作は、この島の夫婦に養子として引き取られた少女の成長を描いたものであるが、この島で生まれた作者の少女時代も作品に投影したといわれており、当時の農作業や学校制度、交通事情も描写されている。現在、インフラも整備されアクセスがいいこともあって、多くの観光客が来島する。一方で、車道の脇には、昔と変わらないであろう金色の小麦畑が美しい。



地図



写真1 赤毛のアンが住むグリーンゲーブルス（緑の切妻屋根の家）を再現した観光地



写真2 当時の生活を再現した部屋（裁縫道具など）



写真3 島内に広がる金色の小麦畑

奄美分室に新たなプロジェクト研究員・菊池隼人さんが6月に着任しました。専門は島嶼域の哺乳類で、奄美ではケナガネズミを中心に研究を行っています。



編集後記

ゆっくりとした夏を過ごしていたのですが、秋を迎え少しずつ例年と同じような忙しい毎日をご過ごしていることに気がつきます。(KK)

島嶼研だより No.90 令和7年11月31日

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24

電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp

WWW <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html>
